

カルロス・フエンテスにおける他者への眼差 ——「チャック・モール」の「脚注」についての検討を中心に——

石 井 登

1. はじめに

カルロス・フエンテスによる最初の短編集である『仮面の日々』に含まれる短編「チャック・モール」¹⁾は、重層的な構造の作品である。語り手によって成される全体の物語と、その語り手の友人であり、アカプルコで溺れ死んでしまったフィリベルトという人物が残したノートに記される日記の内容を語り手が読んでゆくといった点から、フィリベルトによる語りとも言える物語、そして、物語の最後に現れるインディオと語り手の会話から成り立っている²⁾。日記の中に現れる、蘇った古代の神であるチャック・モール(=インディオ)とフィリベルト、語り手の三人の登場人物を中心にこの物語は展開する³⁾。

フィリベルトの日記の中で、彼が手に入れた彫像であるチャック・モールは鱗に覆われた皮膚や三角形の鼻に小さな目、鋭い牙を持つ太古の姿で現代に蘇る。初めはチャックもその太古の神話を語り、フィリベルトにも従う。二人は良好な関係を保っていたが、徐々にその関係は崩れ、チャックは傲慢な神としての本来の姿を取り戻し、フィリベルトを支配し始める。そしてこの物語で重なり合う構造の一つとして、「フィリベルトはチャック・モールと何語でしゃべっていたのか、説明していない。」⁴⁾という不自然な「脚注」が現れる。

この「脚注」は、彼らの良好な関係が崩れゆく中で、不意に現れる訳であるが、物語の中で唯一⁵⁾の、そして奇妙な「脚注」が、この作品の中で単なる説明といったいわゆる脚注としての機能だけではなく、物語中で重要な意味を持ち得ることを検討してみたい。物語に通底していると考えられる他者との相互のコミュニケーションの齟齬、あるいは一方通行性の問題について考える上で、この「脚注」もまた、役割を担っていることを示すことになる。

そこで必要となるのは、ラス・カサスによって編纂された『コロンブス航海誌』である。この日誌が現代に提示する歴史的捏造行為の重要な問題は、「チャック・モール」の「脚注」から始まって、フエンテスの各作品にも共通する、他者の問題へと繋がるものであると考えられる。

さらに、フエンテスは、この他者の問題について、どのような展望、あるいは希望を持っているのかについて、彼の他の作品に見られる記述等から考えてみたいと思う。

2. 「チャック・モール」の主題について

まずは、この「チャック・モール」の登場人物について考えてみたい。この作品における三

名の登場人物はそれぞれの特徴を持ったシンボルとして現れると考えられる。親の遺産である地下室のある、一人で住むには広すぎるような家に住む公務員のフィリベルトは、その高学歴と文化的な生活から、ヨーロッパ的生活を営む存在であるのに対して、チャック・モールは、物語の最後に現れる不可解なインディオと同一視することが可能であろうし、また、友人はこの物語の読者と共に日記を読み進め、フィリベルトとチャックの間の謎を解き明かそうと試みる物語中の読者ということで、それぞれの位置付けを知ることができる。フィリベルトはヨーロッパ的シンボルであると考えられるし、チャック・モールは新大陸の存在、そして語り手である友人は、他の二人の登場人物を概観し問題を抽出しようと試みる読者的な存在となるだろう。それぞれの登場人物のこのような位置付けを考慮しつつ、物語の構造や表現、象徴などを考えてみよう。

作品の構造に着目すると、この物語での視点は基本的に語り手である友人に位置している。時間的な位置としては、溺れ死んだフィリベルトの日記で語られる時間が先にあり、そこで語られる事柄についての視点の主はフィリベルトであるわけだが、物語の大枠となる時間は、友人がフィリベルトの遺体をアカプルコまで引き取りに行き、帰りのバスで日記を読み、フィリベルトの家でインディオと出会い、会話を交わすといった経過を辿る。

この友人の視点から現れるフィリベルト像は、友人と相互の関係を持たず、日記の中から一方的に語りかけてくる存在となる。フエンテスによって意図されたこの物語の構造では、日記の読み手である友人は全知の視点を持たない語り手であり、それ故に理解することを求める存在である。ガルシア＝グティエレスが「読者である友人は実際の読者と物語中の代理人との結び目である。」⁶⁾と指摘するように、語り手と読者の距離を非常に縮めるが、逆に他の登場人物との距離を広げてしまうようにも感じられることに注意したい。これは日記の中の描写を読む語り手と読者が心理状態や意見を共有することを容易にし、逆に他の登場人物たちとの隔たりを際立たせるためのフエンテスの戦略であると言えるだろう。

すでに死んでしまったフィリベルトによって残された手記として日記を読むという状況も、彼と日記を読む者の間の相互に一方的な関係を示すと考えられる。この物語での日記は一方的にその読み手に語りかけ、謎と解釈の問題を残すが、すでに読者は彼に語りかけることもできないし、フィリベルトに起こった出来事について、こちらもまた一方的に推測するしか手立てはない。ここでフエンテスは読者をこのコミュニケーションの不全な世界へ招き入れようと試みていると考えることもできるだろう。

またフィリベルトの日記に「見えない溝」⁷⁾という箇所があるが、ここで示されているのは現在の成功者であるかつての友人たちとフィリベルトの間に横たわる隔たった関係であり、溝によって彼らが異なる世界の住人であることを表している。この物語中の表現は空間的、社会的な隔たりを示す一つのシンボルであると考えられる。

他に、語り手である友人がフィリベルトについて「友人の狂気について納得のゆく説明が思いつかなかった。」⁸⁾と語る箇所があるが、まずフィリベルトを狂気という枠組で捉えていることに注目したい。理解できない友であるフィリベルトに対して、語り手は自らの理解できる位置から狂気という判断を与えているのである。この思考の仕組みは他者を自らの枠組に当ては

めて理解しようと試みるものであり、後に検討する『コロンブス航海誌』におけるクリストバル・コロンの思考に結果的には類似している。そこには一方的な類推という行為の萌芽を感じることができるだろう。これまでそれぞれの出来事に対して理解することを求めてきた語り手さえも、他者疎外を行おうとしているのである。

最後に採り上げておきたいのは、物語の末部に現れる、語り手である友人が遺体を運びに行ったフィリベルトの家でインディオと出会う場面に、「失礼……知らなかったものですから、フィリベルトが……」「いや、気になさることはありません。事情はわかっています。遺体を地下室へ運ぶようおっしゃってください¹⁰⁰」という記述がある。「知らなかった」、「わかっています」と、登場人物によって、物語の最後まで、所謂理解についての言及が為されているが、「事情はわかっています。(Lo sé todo.)」という発言は非常に印象的である。この「Lo sé todo.」という言葉は、二人の会話の中でインディオの返答として書かれているが、この言葉には強烈な排他性を感じられる。例えば会話の途中で、その話を知っていると相手が出た時、更にその話を続けようとするだろうか。物語がこの会話で終るように、二人の言葉による関わりも終わってしまうこととなるだろう。新大陸側の象徴と考えられるインディオによって発せられたこの言葉にも、コミュニケーションを断ち、他者を排してしまおうという意志を感じられる。

ここで、インディオがチャック・モールであり、神である故にすべてを知り得ると考えることもできるが、その拒絶行為の中に存在している、友人を突き放す神の排他性は否定できないだろう。この二人の登場人物の間にもやはり相互のコミュニケーションを志向する姿は見い出すことができず、排他性によって隔たった二人の関係では、それが神であるが故に全智に基づくのであれ、あるいは人間であるが故に推測によるのであれ、一方の側からの理解といった構造のみが存在していると言えるのではないだろうか。

それぞれの例が示しているのは、「チャック・モール」という物語が語りかける主題である他者との「隔たり」であり、他者と関わる上での「推測」や「無理解」と言えるだろう。「チャック・モール」は、このようなコミュニケーション不全の姿を提示する作品であると考えられる。

3. フエンテスの他の作品と「チャック・モール」

これまでの、「チャック・モール」が内包する他者との相互のコミュニケーション不全について考えてきた。ここでオクタビオ・パスによって成されたフエンテス論を考慮しながら、フエンテスの他の作品について考えてみたい。

メキシコのノーベル賞詩人であるオクタビオ・パスは、「チャック・モール」が含まれる『仮面の日々』という短編集について、「カルロス・フエンテスの処女作は『仮面の日々』と題された薄っぺらな短編集だが、このタイトルは以後の彼が向かうべき方向を指し示している。」¹⁰¹と語っているが、仮面とは恐らくは自らを覆い隠すものであり、相互のコミュニケーション不全あるいは無理解をも含み得るものだろう。

パスは、1955年に出版された『仮面の日々』に先行する1950年にそのメキシコ論である『孤独の迷宮』を発表している。この中で彼は孤独と他者について、「孤独は、人間という条件の最も根底に存在する。人間とは自分がひとりぼっちだと感じる唯一のものであり、他者を求める

唯一の存在である。人間の本性は〔中略〕他者の中に己れを実現しようとするにある。』¹²⁾と語っている。この文は言い換えれば、人間は孤独と共に存在しており、孤独であるから他者を求めるものである。そして人間は他者の中に己の姿を見い出すことを望む、ということになる。「他者の中に己の姿を見い出す」とは、他者が己を理解してくれると言っても良いだろう。フエンテスがこの評論から大きな影響を受けた点は、各所で指摘される通りである¹³⁾が、パスが示す、孤独であるが故の他者との関わり、あるいは他者との理解の共有というものに対し、「チャック・モール」で示された相互のコミュニケーション不全は、パスの語る人間の本性からは程遠い、人間性の疎外を描き出していると考えられる。

パスは『仮面の日々』という書物、そして他者の問題について、それぞれ以上のように語った訳であるが、フエンテスはヨーロッパと新大陸の問題について論じた歴史評論である『埋められた鏡』の中で、恐らく最も重要なテーマの一つとして、他者の問題について触れている。これは、他者への一方的な理解によって成り立ってきたと考えられる、ラテンアメリカにおける歴史というものに対する疑義と捉えることができるだろう。フエンテスは、その一方通行的な他者との関わりに関して、次のように問いかけている。

あらゆる発見は、基本的に相互になされるものではないのか？¹⁴⁾

クリストバル・コロンの新大陸発見とその後のラテンアメリカの歴史についてなされたこの問いかけは、自身と他者との関係を考える上で、他者を尊重している点で、オクタビオ・パスに通じるものである。

また、『埋められた鏡』では、新大陸発見によって始まった、西洋から見たラテンアメリカの歴史はコロンによる最初の記述から、すでに問題を孕んでいたことを語る。この歴史評論の序文では、コロンによる新大陸に対するでっち上げについて語る箇所を見い出すことができる。

この地に彼 [=コロン] が思い描いていたアジアの富がないことが分かったと、今度はとほうもなく豊かな森と真珠と黄金を発見したとの報告をでっち上げ、スペインに送った。さもなくばパトロンであるイサベル女王が、このすばらしく知恵の回るジェノバ出身の船乗り資金（と信頼）を託したのは失敗だったと、考えかねないからだった。¹⁵⁾

この文において語られるのはコロンによって予め結論付けられることによってその存在が決まっていた富であり、彼が行った事実の歪曲であった。

この歴史評論の翌年に出版された、1991年のパリでの講演を含む『二つの村のための三度の講演』では、「すべての発見、あるいはすべての出会いは相互のものである。そしてヨーロッパ人たちがインディオを発見したとすれば、インディオたちもまたヨーロッパ人を見つけたことは確かであり」¹⁶⁾と、相互の発見といった『埋められた鏡』と同様の歴史解釈を行っている。

また、2002年に出版されたエッセイ集『これを信じる』では、ヨーロッパと他の世界との関係について、次のように語っている。

アジア・アフリカ、そしてラテンアメリカといった周辺の人々の歴史的な存在の征服あるいは再征服は千年期の重要な出来事の一つであった。それ以前はただ一つの歴史ではなかった。多くの歴史があった。ただ一つの文化ではなかった。多くの文化があった、という訳である。¹⁷⁾

この文は、ヨーロッパの歴史の中に、他の世界の歴史と文化の存在が吸収されてしまったこと、世界の多様性、複数性が破壊されてしまったことを示している。この背景には、ヨーロッパが他者の持つ主体性を認めず、一方的な関係を強いてきたことによる他者の疎外が影を落としていると考えられるのである。

小説に目を向けてみると、新大陸発見を直接的に扱った作品も発表されている。『オレンジの樹、あるいは時の円環』と名付けられた短編集に含まれる作品である「二つのアメリカ」では、「初めに想像がつくことがついにはただ見い出されるだけである。」¹⁸⁾ と、パラダイスへと辿り着くことになった主人公クリストバル（コロン）が持っている、アジアへと到達することへの、ある意味では彼の世界観とでも言えるような目的論が述べられる。この誤った認識方法を用いて、新世界がインディアス＝アジアであるとする、コロンによる想像自体が、すでにでっち上げ、あるいは捏造となる訳である。この物語は、航海に出たクリストバルが、一人パラダイスを発見するが、パライズ Inc という会社を経営する日本人たちと出会い、その世界での自らの他者性を痛感し、自分の世界へと帰って行くというものであった。

また、2001年に出版された中編小説『イネスの本能』においても、ヨーロッパ人ガブリエルとメキシコ人であるイネスの関係から、前述のガルシア＝グティエレスはヨーロッパと新大陸の対立を論じている¹⁹⁾。

このように、フエンテスは、ヨーロッパと新大陸の関係について、あるいは他者の問題について、何度も問い続けている。『仮面の日々』から始まった彼の創作活動の中で、これらのテーマは大変重要な位置を占めていると考えられるのである。

そこで再度「チャック・モール」に目を向けてみると、本文中にも、ラテンアメリカ史やメキシコ史を視野に入れた表現が見受けられるが、特にコロンについては、「コロンブスの新大陸発見前に作られた彫像というのが実は石膏製で、湿気を含むと崩れてしまうのだ。」²⁰⁾ という文が現れる。この部分について少々穿った読み方をすれば、コロンの新大陸発見前の事物について、それ以後に与えられた位置付けは定かではない、あるいはラグニーリヤの店主が言ったように騙されたものとも考えることも可能なのかもしれない。

また、チャック・モールがル・プロンジョンに発見されたことを描く箇所²¹⁾ で、「肉体的に」(físicamente) と語られる点は重要であると考えられる。この部分では、「肉体的に」と限定された彼らの関わりが示されていると考えられ、それは精神的、あるいは言語的な関わりへの欠如の暗喩と受け取ることも可能であると思われる。さらには「残酷でしかも不自然な形で引っ張りだされた」とあるが、これも新大陸における象徴的な神がヨーロッパ人から一方的に扱われたことを示すと言えるだろう。

これらの事柄を考えると、オクタビオ・パスが示した通り、新大陸の歴史と他者の観点から、

『仮面の日々』がその後の作品へ続くフエンテスの重要なテーマの一つであるコミュニケーションの齟齬や捏造の問題を提示していると考えられ、そしてそこにクリストバル・コロンの新大陸発見の問題を見い出すことができるだろう。

4. 『コロンプス航海誌』が含むコミュニケーションの問題

クリストバル・コロンによって書かれ、ラス・カサスによって編纂された『コロンプス航海誌』がある。新大陸発見の意義を正当化するため、コロンは現地で出会った事物をあらかじめ結論を持って書き記し、それが結果的に嘘であったことは、例えばカリベ族についての記述のところで、ラス・カサスが欄外に指摘している通りである²²⁾。類似の解釈は幾人かの歴史学者も指摘している。ツヴェタン・トドロフは「コロンがつけていた日誌とは、実にこうした人たちへの対策用のものだった。」²³⁾と語っているが、この「こうした人々」とはコロンの支援者たち、すなわちスペイン王室であり、「対策用」とは自らの航海が予め計画された通りに実現できたことを証明するものである。また、エドムンド・オゴルマンは、コロンによる新大陸をアジアとする仮説について、「時に応じて強引に極端なまでに解釈して、自分の意見に合うようにデータのほうをねじ曲げざるをえなかった。」²⁴⁾と語っている。航海誌の中で、コロン（提督）が先住民たちとの会話について語る典型的な箇所を引用してみる。

提督はまた、今まで通ってきた島々ではカリベを非常に恐れていた、エスパニョーラ島では彼らをカリブと呼んでいるが、カニバと呼んでいる島もある、彼らはこの地域の島々をすべて荒し廻って、見つけた人間を喰べてしまうという乱暴な者達に違いないとのべている。彼はまた、この地域はきわめて広範におよぶので、言語も違ってはいるが、自分は単語がいくつか判るので、他の言葉の意味もそれから類推できたし、同伴しているインディオ達は自分よりもさらによく理解できたとのべている。²⁵⁾

この引用が含まれる1月13日の日記では、「エスパニョーラ島には食人種が住んでいたことはない。」²⁶⁾といった注が付されるなどの例が示す通り、実はコロンは先住民たちの言葉をほとんど理解していなかったし、都合良く類推していたと考えられるのである。大洋の果てにいなければならなかった怪物をカリベに、ジュゴンの人魚に見立てて記述しているのだ。前述のトドロフがこのことを説明しているので、引用してみる。

彼には自分に話しかける人の言葉をもっとよく理解しようという気はない。それというのも、一眼巨人や有尾人、アマゾンに遭遇することを前もって知っていたからだ。彼は〈セイレーン〉が世間でいわれているような美女ではないことはよく分かっている。しかしだからといって、セイレーンは存在しないという結論を出すのではなく、セイレーンは伝えられているほど美しくはないという別の偏見によって、その偏見を修正するのである。²⁷⁾

このように、彼は出会った事物について、想像されていたものとして偏見によって解釈し、

自分自身にとって都合の良い存在へとそれを変化させる。さらにトドロフは、「何が発見されるかは、彼には前もって分かっている。具体的な経験は、真理の追求のためにあらかじめ決められた規則にしたがって検討されるよりも、その規則にしたがってすでに知られている真理を例示するためにあるのである。」²⁸⁾とも語っている。

こういった一方的な認知の方法によって、コロンは新大陸を語っていった。彼の目の前にある現象を自らが求めるものに当てはめるという規則に従って独自の解釈を行っていったのである。それは先に挙げた『コロンブス航海誌』の引用からわかるように、言葉の解釈にも当てはまると言えよう。新大陸発見の歴史認識において、その形成は類推という曖昧な手段に依っているにも関わらず、先住民たちとの会話は成り立っていると看做され、コロンによる類推は現実の事物として伝えられ、理解されてしまうことになった。

フエンテス同様、キューバの作家、アレホ・カルペンティエールもまた、『ハーブと影』において、コロンのこれらの行為について、フィクションを介して捏造の問題を扱っていると考えられる。この物語の第二章の「手」では、わたし(=コロン)の独白という形式で、新大陸発見の内情が語られているが、例えば「(虚偽目録)」²⁹⁾という言葉も現れるように、捏造の過程が示されている。また、原住民との言語的接触については、「進む度にますますその数をまし多種多様になっていく土地の言葉をわれわれは知らないのであってみれば、これらの食人種を教化する術のないことは明らかなので」³⁰⁾と描かれる通り、言葉を通じての理解が不可能であったことをコロン自身に認めさせている。コロンの行動についてのカルペンティエールの認識もまた、トドロフやオゴルマンから読み取れるものと同様に、類推や捏造によるコミュニケーションの一方通行性の問題を提示するものと思われる。

これまで挙げてきたそれぞれの書物において、そのテーマとして見出せるのは、コロン(=西洋文明)による新世界の受容における一方通行性であり、彼による、都合の良い類推や解釈である。つまりそこには相互のコミュニケーションが成り立たない状態が存在していると言えよう。

コミュニケーション行為というものが、主体と主体の「相互間での了解を志向する行為」³¹⁾であるとするならば、コロンと先住民たちとの間での相互のコミュニケーション行為というものを見い出すことはできないと言ってもよいだろう。当然、言語以外のコミュニケーション行為も有り得る。しかし、すでに結論を持った一方的な類推や解釈が折り込まれる中で、果たして相互のコミュニケーションは成り立つのだろうか。言語によるコミュニケーション行為に限ってみれば、先住民たちの言葉とヨーロッパの諸言語の間に存在する齟齬や認識の違いを踏まえた相互理解の可能性はほとんど問題にされず、コロンが使用し得る諸言語によるあらかじめ結論を持った一方的な類推や解釈による理解のみが成されたのである。この点から、「チャック・モール」の「脚注」について考えることが可能であると考えられる。

5. 『コロンブス航海誌』と「チャック・モール」

『コロンブス航海誌』について、スペインの歴史学者であるマヌエル・ルセナ＝ヒラルドは、「コロンの記述は、探検の歴史を物語っていることから、紀行文学という決まったジャンルの

中に含まれ、[中略]一定の論理を用いて出来事を列挙している」³²⁾と語っているが、この指摘に基づいて、航海誌もまた、紀行文学と位置付けることにしたい。これはトドロフが語っていたコロン支援者への対策用という日記の性格を考慮しても、航海誌が事実を記録するものという範囲を離れ、コロンの恣意的な記述によって記録以上の意味を持つ、紀行文学のテキストとしての性格をも有していると考えられるからである。

一方、フィリベルトの手記は「チャック・モール」というフィクションに含まれる文学内文学テキストと言ってもよいだろう。語り手である友人が読むこのテキストは、チャック・モールが蘇るという出来事について、彼にとっては現実として捉えることができないフィクションと考えるほかない状況が与えられているためである。

また、二つの日記には「記述の変化」といったものが現れる。『コロンブス航海誌』（最初の航海）は1492年8月3日にパロス港を旅立ったコロンが、10月12日にバハマ諸島のウォトリング島に到着の後、カリブ海諸島を探検し、翌1493年3月15日に帰国するまでを記述した日記であった。この日記について、前述のルセナ＝ヒラルドは、「旅の初めの42日間に語り手＝探検者は、追い立てられながら、時間の経過を切り取って、風力や海流、距離について語るが、1492年10月12日から、旅の際立った出来事を記述し、[日記には]彼の意識が被る変化が反映されることになる。」³³⁾と語っている。これはつまり、10月12日以前の日記が風向や移動距離など、ただ状況についての客観的な記述であるのに対して、陸地発見以降はコロンの意識を反映した記述へと変化したということである。

『チャック・モール』の物語の中にも、このような記述の変化に関する部分を見出すことができる。「ここまでのフィリベルトの筆跡は、メモや公文書でよく見かけた、幅の広い、丸みを帯びた以前の字体と変わらなかった。けれども、「八月二十五日」の書き出しは、まるで別人が書いたように思われた。」³⁴⁾という箇所は、日記における記述の変化を語る点で、ルセナ＝ヒラルドが指摘したコロンの記述の変化と同様に、不可解な存在であるチャックと向き合うことになったフィリベルトの意識の変化を反映したものであるだろう。

更に、コロンの日記に対するラス・カサスによる欄外の記述と「チャック・モール」における語り手（あるいは作者）による脚注の間にある、本文から離れた部分に理解についての問題を表記するといったスタイルにも類似点を見出すことができる。

文学的テキストの性格を有し、他者との出会いの日付けによって記述がことなるというテキストの姿、また本文に疑義を唱える注釈の存在といった点で、二つの日記の類似性を読み取ることで、「チャック・モール」という物語は更なる広がりを持って読み得るものとなるだろう。それでは、『コロンブス航海誌』を踏まえた上で、「チャック・モール」の「脚注」について分析してみる。

航海誌の編纂者であるラス・カサスは日記の欄外で提督（コロン）が先住民の言葉を理解しなかったことについて指摘している³⁵⁾。一方の「チャック・モール」の中で、フィリベルトの残されたノートに書かれた日記についても語り手（あるいは作者）による「脚注」があり、西洋化したメキシコ人であるフィリベルトと先住民の神であるチャック・モールという、コロン対先住民の関係に類似した、二人の間の相互理解に関して疑問が呈されている。これによって、

これまで示してきたようなコミュニケーション不全を暗示しているのではないかと推測することができる。

それを指し示す表現と思しき箇所を、物語中の「現実とは何ものにも縛られることのない空想上の大洋で、それを巻貝の中に閉じこめてはじめて現実として認められるようになる。」³⁶⁾と書いた一文に見い出すことができるだろう。これは日記内のフィリベルトの回想といった形で書き記されているが、ここで語られる巻貝は閉ざされたものを暗示していると考えられるのではないだろうか。蘇るチャック・モールとの具体的な関わりを記述していく直前に、このように閉ざすことの意義を語っているということは重要である。フィリベルトがすでにこの時点から理解し得ない現実と直面し、自らを貝の中へと押さえ込み、閉ざしてしまうとすれば、彼ら二人の関わりと「脚注」の内容へと導かれる、最初の兆しを読み取ることができると考えられる。

コロが行っていた一方的な解釈による他者との関わりを踏まえて、「脚注」で投げかけられた疑問について考えてみたい。自らを殻の中へと閉ざし、フィリベルトはチャック・モールと関わっていたことを考慮すると、フィリベルトの日記の中での二人の言葉の違いは、一方的であったとしてもそれほど問題にはならないだろう。しかし、日記について理解しようと試みていた語り手（あるいは作者）にとっては、彼らへの理解を求めているが故に、疑問が残る。

ここでは、閉ざした者と開いた者の間の理解の質が問われている。チャック・モールに対して、フィリベルトが自らを閉ざしたまま、コロ同様の一時的な解釈を行っていたとすれば、お互いが異なった言語を用いていたとしても、理解していたと誤解することは可能であろう。不完全なコミュニケーションの状態では、理解不足あるいは無理解から、良好な関係を維持できると思い込むことも可能である。しかしそれは、物語に示される通り、時間と共に齟齬を生み出し、チャック・モールはフィリベルトを苦しめる傲慢な神へと変化するのである。

本稿の註4) で挙げた「チャック・モール」の原文の通り、「脚注」では動詞に *entender* を使っている。「… en qué lengua se entendía con el Chac Mool」³⁷⁾ は「何語で理解し合っていたのか」とも訳せるだろう。他者理解と相互のコミュニケーション不全は、『コロンプス航海誌』と「チャック・モール」の双方が孕む問題であると考えられ、『コロンプス航海誌』を媒介に、「チャック・モール」の物語を読み進めるならば、一見不可解とも思えるその「脚注」は、他者理解というテーマと作品中のコミュニケーション不全を読み取るための道具として、十分に意味を持つと言えるだろう。

6. おわりに

本稿では、「チャック・モール」に含まれる「脚注」に着目することで抽出してきたこれらの他者理解や相互コミュニケーションの不全についての問題が、フエンテスの諸作品にも共通する重要性を持ち得ることを検討してきたが、最後にこれらの問題に関して、フエンテスがどのような展望を持っているかを示したいと思う。

「チャック・モール」では、各登場人物のそれぞれが、他者への無理解や一方通行な理解といった相互のコミュニケーションの不全な状態が徹底して描かれていた。「チャック・モール」の「脚注」が示す主題も、『コロンプス航海誌』を踏まえて検討した結果、ヨーロッパの象徴とし

てのフィリベルトと新大陸の象徴としてのチャック・モールという図式から、その相互理解に潜む齟齬を明らかにしたと考えられるのである。それはヨーロッパと新大陸の、本来相互のものであるべき出会いの中で生じた他者の疎外であり、その批判であると考えられる。またこれは、語り手である友人さえも巻き込んでいくことから、新大陸発見に関わる問題だけではなく、他者疎外を内に含む貧富の差や差別といった、今なお残る社会問題へと続いて行くものなのかもしれない。

さらに、それはオクタピオ・パスが示した通り、その後のフエンテスにとって重要な主題となったと考えられる。相互のコミュニケーション不全や他者の疎外といった問題は、新大陸対ヨーロッパ、さらには人々の間に存在し、彼の近年の作品においてもなお問い続けられている重要な主題なのである。しかし、フエンテスはこの状況に関して、ただ問い続けているだけではない。彼はその先の希望を模索しているとも考えられるのである。

先に挙げた『イネスの本能』で、ガルシア＝グティエレスは主人公である男女の対立から、物語中の対立構造について論じていることに触れた。物語中に生じる相互のコミュニケーション不全や他者の疎外は避けられないものであろう。しかし、この物語でフエンテスは対立よりもむしろ対立の後に生じる和解を示そうとしたのではないかと考えられる。この中編の第八章では、音楽芸術にその身を捧げる主人公ガブリエルとイネスの対立から、彼女についての理解を求めるガブリエルによるイネスの本能への接近が語られ、第九章では、法と秩序による疎外の犠牲となり、村を飛び出したア・ネルが、新たに現れた同じ姿の男と結ばれる。彼らの試みや行動を通じて、和解へと向かう姿が描かれているのだ。

これらの出来事からフエンテスが示そうとしているものは、決して対立によって生じた相互のコミュニケーション不全や他者の疎外の絶望へと結びつくものではない。それは、『イネスの本能』についてのフエンテスのインタビューの中に示されている。「小説の最後に一つのペアが作られると思う。」³⁸⁾と語るフエンテスは、対立の先の和解への可能性にその希望を持っているのだ。

また、前述の『埋められた鏡』の中に、他者について述べた重要な箇所がある。

われわれは他者を受け入れ、人間としての可能性を拡大することができるだろう。(中略) もしもわれわれが他者のなかに人間性を認められぬなら、自分の人間性にも気づくまい。³⁹⁾

フエンテスにおける他者に対する眼差しとはこのようなものである。他者を受け入れ、認めることが人間の可能性を開くためのあるべき姿であり、フエンテスが持つ希望である。「チャック・モール」から問い続けられてきたフエンテスの問題意識は、この希望によって結ばれるのである。

(註)

- 1) 原文は以下のものを参照した。*Obras completas, Tomo II*, Aguilar, Madrid (1985); *Los días enmascarados*, Editorial Novaro México, México (1966); *Los días enmascarados*, Biblioteca Era, México (1982); *Cuerpos y ofrendas*, Alianza, Madrid (1972). 邦訳は『アウラ・純な魂』木村榮一訳 (1995) を中心に、『アウラ』安藤哲行訳 (1982)、「チャック・モール」野谷文昭訳 (1980)、「チャック・モール」蔭山昭子訳 (1978) も参照。本文中における「チャック・モール」は作品名であり、チャック・モールは作中の登場人物を示す。
- 2) メキシコのカルロス・フエンテス研究家、ヘオルヒーナ・ガルシア＝グティエレスによる先行研究の以下の文を参照した。…dos narraciones y un diálogo constituyen la construcción verbal que es “Chac Mool”. *Los disfrases: la obra mestiza de Carlos Fuentes*. p.24.
- 3) 同様に以下の文に従う。… el indio que aparece ante el amigo es Chac Mool. *Los disfrases: la obra mestiza de Carlos Fuentes*. p.25.
- 4) フエンテス『アウラ・純な魂』p.22 原文は、“Filiberto no explica en qué lengua se entendía con el Chac Mool.” *Cuerpos y ofrendas*. p.28.
- 5) *Cuerpos y ofrendas* では p.27. に “Deidad azteca de la lluvia” という Tlálóc について説明する脚註が付いているが、これによって脚註の位置付けが単なる説明であるという意味に変わってしまう可能性は否定できない。但しこれはスペインの Alianza Editorial から出版されたことから、編集者による単なる説明のための追加という立場を採りたい。また *Cuerpos y ofrendas* の木村訳でもこの脚註は付されていない。さらに言うと、*Cuerpos y ofrendas* 中の「チャック・モール」は、*Los días enmascarados* 中のそれと記述が異なっている部分がある。書き換えが行われたと考えられるが、このヴァリエーションについての問題は今後の研究課題としたい。
- 6) *Los disfrases: la obra mestiza de Carlos Fuentes*. p.27.
- 7) 『アウラ・純な魂』 p.10
- 8) *ibid.* p.27.
- 9) 『コロンブス航海誌』は、クリストバル・コロンによって記された日記をバルトロメ・デ・ラス・カサスが編纂したもの。原典は *Libro de la primera navegación*. 『コロンブス航海誌』の「コロンブス」は「コロン」を指す。
- 10) *ibid.* p.27.
- 11) バス「カルロス・フエンテス論—仮面と透明性」『文芸雑誌 海』 p.321.
- 12) バス『孤独の迷宮』 p.207.
- 13) 例えば、『アウラ』における安藤哲行の解説 (p.215.)、『アウラ・純な魂』における木村榮一の解説 (p.220.) 等。
- 14) フエンテス『埋められた鏡』 p.98.
- 15) [] は拙筆者。『埋められた鏡』 p.7.
- 16) Fuentes: *Tres discursos para dos aldeas*. pp.128-129.
- 17) Fuentes: *En esto creo*. pp.128-129.
- 18) Fuentes: “Las dos Américas” en *El naranjo, o los círculos del tiempo*. p.230.
- 19) ガルシア＝グティエレスは『イネスの本能』についての論文「ファウスト、そしてドンファン」の再現」で、主人公ガブリエルとイネスについて、〈アメリカ＝女性〉対〈ヨーロッパ＝男性〉という対立構造を読み取っている。ただし、筆者はこの小説が示しているのは対立ではなく、むしろ双方の和解であるという立場を取りたい。“Recreación del Fausto y del Don Juan: Instinto de Inez” en Popovic Karic, Pol. *Carlos Fuentes: Perspectivas Críticas*.

- 20) 『アウラ・純な魂』 p.16. 原文は“Su escultura precolombina es puro yeso, y la humedad acabará por arruinarla”. *Cuerpos y ofrendas*. p.24.
- 21) *ibid.* p.21.
- 22) 註3に記される「これはカリベ族ではない。エスパニョーラ島には食人種が住んでいたことはない。」という箇所に見られる通り、先入観を持って行われた捏造だと言えよう。『コロンブス航海誌』 p.207.
- 23) トドロフ『他者の記号学』 p.12.
- 24) オゴルマン『アメリカは発明された』 p.97
- 25) 傍線は拙筆者。提督という3人称の名称についての説明は『コロンブス航海誌』の p.276. を参照。ここではラス・カサスによるコロンへの批判的視点が含まれると思われる。ラス・カサス『コロンブス航海誌』 p.205.
- 26) *ibid.* p.207
- 27) 『他者の記号学』 p.22.
- 28) *ibid.* p.23.
- 29) カルペンティエール『ハーブと影』 p.125.
- 30) *ibid.* p.161.
- 31) 「コミュニケーション行為の理論」(山口節郎)『コンサイス 20 世紀思想辞典』 p.388.
ここでは、ユルゲン・ハーバマスによるコミュニケーション行為の理論についての説明が成されている。(道具主義的合理性)に対する、強制なき相互主観性としての〈コミュニケーション的合理性〉という概念が提示される。コロンブスによる類推や解釈は〈道具主義的合理性〉に含まれると考えられ、主体・客体のモデルの中で先住民を客体として一面的に捉えていると考えられる。
- 32) Lucena Giraldo: “La construcción del exotismo americano de Cristóbal Colón a Hernán Cortés” en *De la unión de coronas al Imperio de Carlos V, Vol.2*. p.392
- 33) [] は拙筆者。 *ibid.* p.393.
- 34) 『アウラ・純な魂』 pp.17-18
- 35) 『コロンブス航海誌』 p.207.
- 36) 『アウラ・純な魂』 pp.18-19.
- 37) *Cuerpos y ofrendas*. p.28.
- 38) Mora: “En ‘Instinto de Inez’ he dado máxima libertad al lector, es él quien debe continuar la novela.” en *El País*. 12/5/2001
- 39) 『埋められた鏡』 pp.418-420.

〈参考文献〉

- オゴルマン、エドムンド、青木芳夫訳、『アメリカは発明された』、日本経済評論社、1999。
カルペンティエール、アレホ、牛島信明訳、『ハーブと影』、新潮社、1984。
木田元、他編、『コンサイス 20 世紀思想事典第 2 版』、三省堂、1997。
トドロフ、ツヴェタン、及川馥、他訳、『他者の記号学』、法政大学出版社、1986。
パス、オクタビオ、木村榮一訳、「カルロス・フエンテス論—仮面と透明性」、『文芸雑誌 海』、中央公論社、第 12 巻第 10 号、1980、pp.321-328。
——、高山智博、『孤独の迷宮—メキシコの文化と歴史』、熊谷明子訳、法政大学出版社、1982。
フエンテス、カルロス、蔭山昭子訳、「チャック・モール」、『世界短編名作選ラテンアメリカ編』、新日本出版社、1978。

- 、野谷文昭訳、「チャック・モール」、『文芸雑誌 海』、中央公論社第 12 巻第 10 号、1980、p.276.
- 、安藤哲行訳、『アウラ』、エディション・アルシーヴ、1982.
- 、木村榮一訳、『アウラ・純な魂』、岩波書店、1995.
- 、古賀林幸訳、『埋められた鏡』、中央公論社、1996.
- ラス=カサス、バルトロメ・デ、林屋永吉訳、『コロンブス航海誌』、岩波書店、1977.
- Fuentes, Carlos, *Los días enmascarados*, Editorial Novaro México, México, 1966.
- 、*Cuerpos y ofrendas*, Alianza Editorial, Madrid, 1972.
- 、*Los días enmascarados*, Biblioteca Era, México, 1982.
- 、*El naranjo, o los círculos del tiempo*, Alfaguara, México, 1993.
- 、*Tres discursos para dos aldeas*, Fondo de Cultura Económica, Buenos Aires, 1993.
- 、*El espejo enterrado*, Taurus, México, 1998.
- 、*Instinto de Inez*, Alfaguara, México, 2001.
- 、*En esto creo*, Seix Barral, Barcelona, 2002
- García Gutiérrez, Georgina, *Los disfraces: la obra mestiza de Carlos Fuentes* (2ed), El Colegio de México, México, 2000
- 、 “Recreación del Fausto y del Don Juan: Instinto de Inez” en Popovic Karic, Pol, *Carlos Fuentes. Perspectivas Críticas*, Siglo veintiuno, México, 2002.
- Lucena Giraldo, Manuel, “La construcción del exotismo americano de Cristóbal Colón a Hernán Cortés”, en *De la unión de coronas al Imperio de Carlos V, Vol.2*, CSIC, Madrid, 2001.
- Mora, Rosa, “En ‘Instinto de Inez’ he dado máxima libertad al lector, es él quien debe continuar la novela” en *El País*, 12/mayo/2001

(いしい のぼる 本講座受講生)

<RESUMEN>

La mirada al otro
en *Chac Mool* de Carlos Fuentes

ISHII, Noboru

Chac Mool, contenido en el primer libro de Carlos Fuentes, *Los días enmascarados*, es una obra de estructuras apiladas y tiene una nota al pie de página, que no se entiende fácilmente. ¿Qué quiere decir: “Filiberto no explica en qué lengua se entendía con el Chac Mool.”? En este artículo se intenta hacer una interpretación de esta nota y del tema de la falta de comunicación mutua, que ya está presente en *Diario de Colón* de Fray Bartolomé de Las Casas, y en *El espejo enterrado* (1992), *Tres discursos para dos aldeas* (1993) y *En esto creo* (2002), obras de Carlos Fuentes de los últimos años. Al mismo tiempo, se examina si el comentario a Fuentes en el libro, *La máscara y la transparencia*, de Octavio Paz, es válido.

La invención colombina del Nuevo Mundo, según Las Casas, Tzvetan Todorov, Edmundo O’Gorman, Manuel Lucena Giraldo, Alejo Carpentier y la obra *El naranjo, o los círculos del tiempo* de Fuentes, nos da una pista para su interpretación. Según el *Diario de Colón*, los indígenas y Colón no podían comunicarse entre sí, y en *Chac Mool*, se establece una relación semejante entre Filiberto y Chac Mool.

Es muy importante pensar en la idea de una comunicación unilateral en *Chac Mool*, que se manifiesta en algunos símbolos y frases de la obra. Uno de los propósitos de Fuentes es señalar la alienación con el otro, como ya lo había hecho Octavio Paz en *El laberinto de la soledad*, al hablar de la invención del Nuevo Mundo.

En los estudios de Fuentes antes mencionados, podemos observar el problema de la alienación presente y el de la comunicación en *Chac Mool*. En esta obra, Fuentes expone el problema de la conciencia contemporánea y se dedica a este problema en sus últimas obras, como sigue vigente la visión de Octavio Paz.

Fuentes tiene la esperanza al problema. Se puede descubrir su esperanza por lectura de la obra *Instinto de Inez o El espejo enterrado*.